サケの稚魚を優しく見つめる児童ら

黒崎小

サケの赤ちゃん誕生

採卵授精後2カ月半でふ化

サケ教育で知られている黒崎小学校（佐々木一夫校長、児童14人）が飼育しているサケの卵がふ化し、サケの赤ちゃんが泳ぎ始めました。

ふ化が始まったのは2月14日からで、約一週間でほぼ全部の卵がふ化しました。2つの水槽に分けられた卵約2000個は、昨年12月3日、同校の児童が採卵授精したもの。ふ化までに約2カ月半かかりましたが、その間児童らは水槽の掃除や、死んだ卵を取り出す作業をしました。

現在の稚魚の大きさは約1・5チセン、ポッコリ膨らんだお腹が重たそうに元気に泳いでいます。稚魚は、約2カ月間、餌やりや水替えなどをしながら大切に育てられ、4月下旬には児童らの手で普代川河口に放流されます。

1年の金子美希さんは「隅っこに集まって、押しくらまんじゅうしているみたい。早く大きくなってね」と愛情を注ぎます。同校の命の大切さを学習する取り組みは、昭和57年から行われています。

読書感想文コンクール・優秀賞作品紹介 ②

★小学校中学年の部

「よみがえれ、えりもの森」を読んで

鳥茂渡小4年　日野澤（ひのさわ）　朱莉（あかり）さん

北海道の日高地方にえりも町というところがあります。この物語は、このえりも町に住んでいるコンブ漁師たちが長い年月をかけて森をよみがえらせた話です。

わたしがこの本を読もうと思ったのは、わたしが住んでいる普代村にどこかにている感じがしたことと、題名の「よみがえれ」という言葉に、きょうみをもったからです。

わたしが住んでいる所は、たくさんの森があります。そして普代村は、えりも町と同じように海からワカメやコンブ、そして鮭などがたくさん取れます。学校では、毎年、十一月十一日に鮭の日給食があります。

去年の鮭の日給食の時、漁師さんが来て、「おいしいワカメがたくさんできるためには、みなさんが住んでいる所の森が大事なんです。森が作った落ち葉などからできたえいようが川から海に流れ、それがワカメのひりょうとなって、おいしいワカメがたくさんできるんです、だから森を大切にしてくださいね。」と話していました。わたしは、この本を読んでいてその時のことを思い出しました。

えりもは、昔、たくさんの森にかこまれていたそうです。そこに百五十年前、コンブとりの人たちが来て、木で家を作ったり、火をもやすねんりょうにしてたった五十年で一本の木もなくなってしまいました。その結果コンブも魚もとれなくなってしまいました。やがてみんな町をすてて出ていこうとしたとき、コンブ漁師だった二十四さいの常雄さんという人が、「おれたちの手で海とふるさとをよみがえらせるべ。」と人々によびかけました。みんなもいっしょに立ち上がりました。

でも、かんたんには森はよみがえりません。えりもは、風が年中強くふきつけ、かぶせた土やまいた植物のたねがすぐふき飛ばされ、なかなかうまくいきません。でも、人々は、あきらめずに取り組み、十七年後にようやく草が育ちました。次は植林です。その植林もかんたんにはいきません。かわいた土地でよく育つクロマツを植えたのに、砂地の下にある水がまじった地そうのためにすぐにかれてしまいました。この水をぬくために土をほる作業をしなければならなくなりました。これも大変な作業でした。二十年たち、やがて常雄さんは病気になってしまいます。でも、遠い町の高校に行っていた息子のひでおさんが帰ってきて、森をよみがえらせる作業をひきつぎました。

そして、ついに常雄さんたちが立ち上がってから五十年たち、やっとくろぐろと光るふとったコンブがとれたのです。

わたしは、この本から二つのことを学びました。一つは、自然のきびしさです。そしてもう一つは、ふるさとを守る人間の心の強さです。

わたしは、この物語を読んで、自分の住んでいる森を守ることがなぜ大切なのかよくわかりました。わたしも自分の住むとりもの森をしっかり守っていきます。

＝原文のまま掲載＝